学校訪問旅行記（その四）

――東ドイツ・話し合いから――

村田修子

メキシ暖流の流れる沿岸一帯が濃霧に見舞われることは以前から聞いていました。けれども私は霧について余りよく知りませんでしたから、「昨日帰国するはずであった日本人のグループがヒースロー空港で相当待たされたらしい」という話を聞いても、自分が幼いとき過ごした千葉県の銚子で霧の出たときになる霧笛の気味悪い響きを思い出したぐらいで、あまり身近なものという感じはしませんでした。まして、それが自分のこれからの行動に重大なかかわりを持つとは思いもしませんでした。

女の人までボディ・チェックされて、あまり感じのよくなかった空港での手続きを終え、搭乗を待つばかりになりましたが、待てども待てどもなんの連絡もありません。このころからしだいに「これは大変なことだ」という気がしてきました。その間待つこと八時間。あまり長いので、一同待合室を出てお仕きせの食事に行き、再び手続をし直して待合室に入ったり、チップに気を使わなければならないトイレに何度も行ったり、売店をのぞいて手持ちの少なくなったお金と見比べたりして過ごすよりほかありませんでした。なにしろ時間が長いので、しだいに周囲の人とも顔見知りになって、ことばを交わすようになりました。

その中に丁度私共と同じように東ドイツへ行くという、イギリス人のジミー少年と両親、よちよち歩きの妹、の一家がいました。

これはどこでもそうでしたが、私共の一行は子どもの姿を見掛けるとにこにこして話しかけたり、折り紙を折ってあげたりして、みんながうれしそうな顔になるのです。ですからこの一家とも直ぐ仲良しになりました。このジミーとの片言の話し合いや触れ合いから、いろいろなことを学ぶことができました。彼はすぐ「メイ・アイ・ヘルプ・ユー」といって、私共の役に立ってくれようとしていることがよく感じられました。そういう気持ちを小さい時から持

◀ジミー少年とその家族

っているということはすばらしいことだと思いました。

少年を扱う両親の態度や、一緒にした食事のときのしっかりとしたマナー、また、長い退屈な時間を大人相手に過ごしていても、妙にべたべたしたりはしゃぎ回るでもなく、その場をわきまえて、ほどほどに接することができるのには感心しました。むしろ可愛らしいという気持ちから私共があまり好奇的に接することで、それらを乱すのではないかということが気になるぐらいでした。妹さんのことをとてもかわいがって〝彼女はスモール・レディ〟と紹介してくれました。

東ベルリンの霧はなかなか晴れませんでしたが、午後三時すぎやっと飛び立つことができました。けれどしばらくすると東ベルリンは霧で着陸できないためにアムステルダムに着くことになり、予定外のためビザのないまま午後七時ごろ空港に近いホテルに一泊することになりました。

その日は何もせずに終わった一日でしたが、それにしてはひどく疲れました。

次の日、目がさめるやいなや窓の外を見ると霧はまだそのまま、不安感がさっと胸をよぎりました。それでもいつ出発するかわからないので待機しているよりほかはありません。

またまた忍耐の五時間近く、そしてやっと飛び立った機の着いたところはなんとポーランドのワルシャワ、ポエスキー空港でした。それでも東側に入れたのです。パスポートは預けてしまったので、またまた忍耐待ちよりほかはありません。待合室内の歩ける範囲を一応探索して、品物の並べ方や、作られた民芸作品の素朴さ、地味な色彩、実用的なものが多いことなどで、今まで経験した処とはやはり異なったものを感じました。

これから先は一体どうなるのかわからないまま、今の自分の気持ちが不思議でなりませんでした。それは、昨日から待つことばかりで時間がすごくもったいないと思うのですが、でも、待たされることに対して、またこうなってしまったことについて、いらいらしたり、焦ったりすることが全然ないのです。みんなの様子もやはり同じでした。

もし日本でこれと同じようなことがあったとしたら、じっと待っている、ということなど絶対にないと思うのです。もちろんどうにもならないことなので、あきらめの心境だったからに違いないのですが……。われながら不思議でした。

十時間待ちに待ったすえ、夜遅くなってからとうとう汽車で東ベルリンに行くことになりました。

ロンドンからずっと一緒の人たち五十人近くの者がそれぞれ重い荷物を引きずりながら、驚きの目を見張るワルシャワの群衆の中を、白い息を吐きながら汗まみれになって霧の中を停車場へ向かいました。「民族の大移動みたいね」など話して、てれくさいのをまぎらわしながら、ステップの高い汽車によじのぼり、やっと八人一室になっている汽車に乗り込みました。

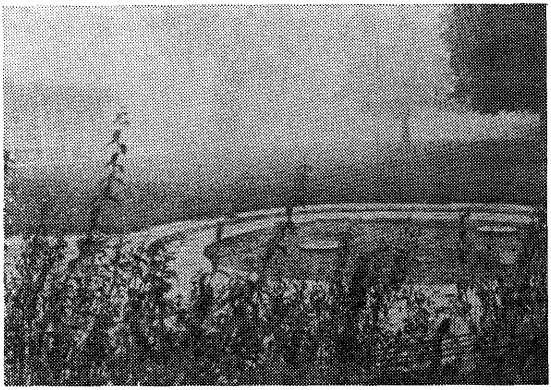
私の入った部屋には体の大きいドイツ人の男性が二人いたので、言葉の通じない不自由さはあっても荷物の世話やらすべてに親切に手伝ってくれたので本当に助かりました。予定になかった汽車に乗れたことを心の中で喜びはしましたものの、ガタガタという響きとともに隅から入ってくる風は冷たく、暖房のない一夜は厳しいものでした。

うとうとしていた夜明け方、ものものしい音と、叫び声にも聞える厳しい声とともに一室一室が開けられ、最初の二室の人たちはパスポートを取り上げられてしまいました。命の次に大事なパスポートのことなので、慌ててそれを報告に行く人、ビザを持たないでこの国に入ったことを証明してくれている同行のドイツ人の声、どうなることかと成り行きを息を詰めてうかがっている私共、緊迫したひと時でした。

了解ができて、ポーランド出国の検問が終わり、役人が去ってほっとするとともに気がつくと霧の中、朝が明けていました。窓から見えるものは線路に沿った立木の黒々とした影だけ、さっきの騒ぎはうそのような静けさでした。汽車の速さが緩くなり霧の中に止まると、今度は東ドイツへ入国のための検問が同じにぎにぎしさで展開しました。

日本では見慣れなくなった肩章のついたカーキ色の制服、なんだか体が固くなってくるのを感じました。

そういう緊張の中で、ポーランドと東ドイツの両方の国境（汽車で五分位の間隔が



▼霧の中の円型の幼稚園・砂場

あった）の様子をまのあたりに経験することができたことは感慨ひとしおでした。

東ベルリンの駅からは、ハンスさんという六十歳ぐらいの高校の音楽を担当している方のガイドでライプチヒへ向かいました。

霧で予定が大変狂ってしまった上に、東ドイツでは学校訪問は許可にならない、ということが伝えられました。

・苦労してやっと入国したのに報いられなかったこと。

・今までに参観の許されたのは東ベルリンの一園だけで、しかも社会党議員の含まれた議員団だけで、その他の例はないという難かしさなのに予定に組まれていたこと。

・一番期待していた訪問が実現できなかった。

一同はがっかりすると同時に悲憤こうがいの極に達しました。

団長さん方はその経過を文部省に連絡したり日本の大使館に交渉に行って、何等かの形で見せてくれるように要請しましたが、訪問は許可されない代りに、東ベルリンの教員のための会館で、初等教育のエキスパートの方と最終日に話し合いをすることができるようになりました。

ハンスさんは私共が訪問ができないことでがっかりしている様子を感じて気の毒に思ったのでしょう。「幼稚園を見せてあげる」と言って、そのそばを通るとバスをとめて「写真を早く撮りなさい」と言ったり、中に入って行って交渉してくれました。二園とも建物の中には入れませんでしたが、庭に入って中を少しのぞいたりすることができました。私たちはハンスさんの厚意に感激しながらも、この厚意がハンスさんに迷惑になっては大変と思ってその意を伝えてもらいましたが、彼は大胆に行動

してくれました。

園の先生方は、交渉の途中でドアをばたんとしめたり、昼寝をしていたらしい子どもの側のカーテンをさっとしめたりしました。ガラス越しにその隙間から子どもがのぞいていたのは印象的でもあり、また何か淋しい気がしました。

このハンスさんの処置は、次のこととともにいつまでも心に残っています。

それは、やっとライプチヒのホテルについたとき、入口で少し待ち次いで奥のサロンに行くように指示があってそこで待つ間、私たちを退屈させまいとして、ピアノをひいてくれました。そのうちの一曲「ラールゴ」を弾き出したとき、私がメロディをハミングしたのを見て目を輝かし、うれしそうな顔をしてくれました。

また最後に空港まで送ってくれたとき、「東ドイツでは男は六十五歳、女は六十歳にならないと外国へ旅行に出られないので、自分も六十五歳になったら日本にも行きたい」と言い、空港の一番終わりの細い長い道の遙か向うで、最後に両手を頭上にしっかり握って振り、からだ全体でさよならをしてくれた姿は忘れることができません。

エキスパートとの話し合いが持たれる間、ヨハン・セバスチャン・バッハの墓のあるトーマス・チャーチで、誇らしげに話してくれるハンスさんの説明を聞いたり、第二次大戦の戦傷のあとがそのままになっている教会跡を見たり、不滅の火が二人の兵士によって守られている無名戦士の墓を案内してもらいました。またハンスさんには二人の娘さんがいて、一人は現在大学で歴史を専攻しているということで、その費用は、国から大学生に与えられる百八十マルクで、本を買ったりできるのであまりかからない、といっておられました。そしてご自分のことについては、一週六日間二十六時間働き、そのほか五日間は工場などで働くことになっている、ということでしたが、あまりよく理解できませんでしたが、こうしてガイドをしてアルバイトをして働いているのも、それに当たるということでした。いろいろなことを聞かせてくださって、自分の月給は千二百マルク、税金が百二十マルク、保険が六十マルク、家賃が六十八マルク、電気代・車庫代が十五マルクずつで、家はフラットとよぶキッチン、バスルーム、ベランダつきのセントラルヒーティングになっているアパートということでした。休暇は、秋、クリスマス、五月に八日間ずつ、二月に三週間、夏八週間で、有給休暇は二十四日間、そのときは家で、またはトレーニング・カレッジがあって、そこで勉強するということです。

日常品のうち日本製のものは、靴下とか衣料が少々売られているが、大体はチェコ

などの東側の製品であるというようなことなど、ハンスさんは、私たちにいろいろなことを聞かせたかったようでした。

＊　＊　＊

ドイツ民主共和国の教育についての話し合いは、滞在最終日の午後にもたれました。

▲バッハの墓

教育の概要

教育には「学校教育」と党の青少年教育とがあって、学校教育は、幼稚園・保育園→オーバー・シューレ（上級学校、六歳入学で十年間の義務教育）→大学と、体系的に一本化されています。

大学へ入学する資格としては十年の義務教育の後、さらに第十一、十二学年に進んで、アビトウアという資格試験に合格しなければならないということです。

主義が異なるので私共の考え方とは当然ちがう点があるのはもちろんですが、

・社会主義的にすべての方面にわたって教育され、しつけられた人間を育成する。

・この国の農業（土地・地下資源等）はすべて国民のもので、一切の搾取はありえない。いうならば、国家および国家機関のすべては労働者の手にあって、彼等によって経済、文化等の開発は計画通りに行なわれている。すべての学校は国立である。（私立の学校はありえない）

・学校で子どもに教育する場合も前述の立場をとって子どもに説明し、証明できないものは教えない（但し童話は別）、そして村と都会、両親の職業等による一切の差別はない。

・六歳で教育が始まり、それに要する経費はすべて国家が補充する。就学前の教育においても同様で、学校は実際の生活と深いかかわりを持ち、次の点を強調す

る。

①労働に対する愛情をよびおこすような教育……たとえば物を作る教育、庭園作業、工場実習等。

②生活の連帯感の養成。

③創造性、まじめさ、正確さを身につけ、熟練された技能の修得につとめる……理論でなく労作教育の徹底。

以上のような概要から目標の具体的なものまで、用意された通り整然と説明されました。そしてなお、戦後三十年間に目指した方向として、

・幼稚園教育の充実については八十二%の就園率を九十%にしたい。

・一年から四年までの六十%が放課後一定の場所に集まって学べる集会所の設立を目指す。

・十歳から十六歳までの生徒のために学校とは別にクラブ活動に従事できるようになった。

・十二学年までに在学する児童生徒の九十%は「若いピオニール」または「自由ドイツ青年同盟」のどちらかに属し勉強している。

・ドイツ民主共和国では、教育者の不足は全くない。

たて板に水を流すように続く聞きなれないドイツ語と日本語の、リズミカルに交わされる一言をも聞きのがさないように緊張していましたが、なかなか終わらない説明に、こちらの質問に対して答えてもらう時間がなくなってきていることを心配したり、「百聞は一見に如かず」だから、実際を見せてくれればいいのに、と思ったりしました。

時間が足りなくなることは予想していましたので、前もって皆で話し合っておいた質問を代表して団長さんがしました。それに先だって国井先生は、

・私たちが一番期待し、楽しみにして訪問したところであるが、実現されなくて残念である。

・二日間の苦労の末の入国で、われわれの熱意は盛り上がっている。

と、満たされなかった気持ちを率直に、また熱意を込めてひれきしたので、二人の方も「霧にはよく予定を狂わされることがある」と同情してくださいました。

質問は大きくまとめて四つしました。

一、幼稚園教育について、当面どのような点に最も力を入れているか、またその措置は。

答、東独の幼稚園は職業婦人のために作られたもので、一日中幼児が生活できるようにしている。生活するのに必要なすべてのものを備え、遊びにも勉強にも彼等が楽しく感じとることができるよう工夫されている。重点としては、自主性の育

◀東ベルリンでの話し合い

成……ロッカー、洗面所などを綺麗にし、他の園児のために何ができるか、親切で思いやりを持ち、友だちと融和できるように。

授業の形態としては、二十分ずつ一日に二回、主として国語、自然、社会の現象、スポーツ、算数などの基礎を教える。特に国語と数量感覚を練る。

二、幼稚園の一日のプログラムについて。

答、朝七時―八時に開園し、グループ遊び、共同作業による朝食の準備。

八時以後は、軽い体操、絵本読み、絵画製作、自由遊びの中で買い物、ままごとなど、十一時からは食前の身だしなみ、髪の手入れなど。

午後からは昼寝、自由遊び、冠水作業。

午後七時まで保育するが、帰りは両親の迎えで帰宅させる。午後七時以後になる親にたいしては労働証明を持参させ、親が面倒をみることができるのに預けることがないように防止策が講じられている。

問違ってお伝えするといけないので、通訳していただいた通りにのせると以上のようなことでした。

一番違いを感じたのは、子どもが三食とも園にきてするということです。

私はすぐイギリスのデイ・ナーサリーで、一歳二か月ぐらいの砂の中に座って遊んでいた子が、私たちが近づくと両手を差し延べ、じっと目を動かさずに見上げていた姿、抱いたらなかなかおりようとしなかった様子を思い出してしまいました。

子どもを早くから集団生活の中に入れて育てることの是非がいま各所で論議されているようですが、その中の是と主張する理由に、たとえば「家庭では子どもが病気に

なったときなど、母親の判断で処置し、手当てが遅れるとか、十分な扱いができないが、整った設備の中で生活していれば……」ということがいわれていたのを読んだことがありますが、情緒をもって、そして生きている子どもたちに対して、何か目に見えない大切なものが欠けることが私はやはり心配になりました。

そしてハンスさんが現在の問題について話された中に、「最近若い母親が、親としての自覚が不足していて、自分たちの楽しみのために家庭教育を考えない傾向にある」といわれたこと思い合わせて、現実と施策との矛盾を感じました。

それにしても、このことは世界中の問題になってきていることの感を深くしました。

三、教師の勤務時間について。

答、朝は八時から十九時までが一日の勤務で、週当たり四十時間である。ただし午前六時から八時までの間は、補助教師が輪番で当たる。

四、教師の養成と資格。

答、十二年制の学校の卒業者が有資格者。十年制卒業後も三年の専門学校を終えたもの。教育実習は週に一日（三年の専門学校）と大学で高度の専門教育を受けた場合は三―四週間と卒業前に八―十二週実施する。

＊　＊　＊

一応話し合いがあってよかったとは思うものの、何かすっきりしないまま出発の時間が迫ったため、話し合いは切り上げましたが、「今日は飛行機は飛び立っていない」という情報が伝わってきました。主な仕事はもう終わったし霧などによる重苦しい気持ちで、一刻も早く次の国へ行きたい、というより東ドイツを出たい、と思っていましたので、それを聞いて神に祈るような気持ちでした。

またしばらくの空港待ちでやっと飛び立てました。期せずして二十九人の口から〝バンザイ〟の声と拍手が起こりました。みんな晴ればれとした顔で喜び合いました。それにつれて共に喜んだのか私たちのために喜んでくれたのかはよくわかりませんが、同乗の外人たちも声を上げ手をならしました。機内はなごやかな空気になって、話し合っている中に〝やっと〟〝脱出〟〝解放〟などという種類のことばが聞かれたのは、むべなるかな、でした。

けれどこの五日間は、何にも代えがたい経験でした。この共通した難関を乗り越えたことによって、われわれ二十六団ファミリーの団結は一層固くなってゆきました。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）